初の戦後生まれ 継承に力

八代・ゆだ苑理事長 就任5か月

東京大空襲被災の祖母他界 語り手の減少実感

県原爆被爆者支援センター「ゆだ苑」（山口市元町）の理事長が、12年ぶりに交代した。5月に就任した山口大経済学部の准教授、八代拓さん(40)は、初の戦後生まれの理事長だ。就任から約5か月。被爆者との交流を深めながら「被爆体験の次世代への継承に力を注いでいきたい」との思いを新たにしている。

（内田詩乃）

埼玉県入間市出身。「なぜ戦争が起きてしまったのか。当時何が起きたのか知りたい」。そう思ってきた。

東京大空襲で被災した祖母は、焼夷弾が空中でばらけて地面に落ち、炎が上がるまでの様子を幼い頃から何度も語ってくれた。そのたびに心に湧くのは、恐怖ではなく、人々の生活を奪う戦争の残虐さへの怒りだった。祖母は3年前に他界。悲しみとともに、語り手の減少を実感した。

大学では「第二次世界大戦後の日本と東南アジアの関係」をテーマに研究している。学生にゆだ苑について知ってもらおうと、2019年12月、岩本晋・前理事長に頼んで見学させてもらったことをきっかけに、活動を審議・確認する評議員を務めるようになった。

「被爆体験の継承に力を注ぎたい」と語る八代理事長

今年に入り、前理事長から次期理事長の就任を持ちかけられた。責任の重さに当初は尻込みしたが、研究分野との親和性や、人の役に立つ活動だという思いから、就任を決意した。

8月に理事長として初めての広島原爆忌と長崎原爆の日を、9月には山口原爆死没者追悼・平和式典を終えた。一緒に式典の準備をした被爆者の1人は、77年前の経験を最近の出来事のように語った。「あの日」を一緒に過ごすことで、彼らにとって「人生そのものを表すような大事な日なのだ」と感じられた。

「被爆経験に触れるのは古傷をえぐることにはならないか」「それでも継承のためには聞かなければならない」――。

就任当初は接し方に悩んだが、被爆者と触れ合うち、「無理に聞き出す必要はない。語ってくれる時を待てばいい」という考えに落ち着いた。「被爆者の方々にはまず、穏やかで楽しい生活を送ってほしい」と語る。

22年3月末日現在、県内の被爆者の平均年齢は85・7歳。1975年には7366人だった被爆者は、1850人になった。体験継承の必要性を、改めて感じる。「被爆者の語りをインターネット上で発信するといった、半永久的に残せる手法を考えなければならない」と強調する。

戦争経験も被爆体験もない自分が、心から被爆者たちに寄り添えるのか、との葛藤は今もある。それでも「被爆者支援を第一に、記憶を次世代につなぐ役割を果たす」と心に決めている。